

## せみ時雨

奄美市立朝日中学校

二年 濱田 鈴

陽介は走っていた。

早朝の道に人の気配はなく、セミの声が聞こえ始めている。周囲の木々をゆらす風は、いつものように気持ちいい。

陽介はサッカー部に所属している。レギュラーを目指して、最初のうちは自分なりに一生懸命練習していたが、やっぱりレギュラーにはなれない。部活をやめてしまおうかとも思ったが、それはなんとなく気が引けたので、まだ、部にとどまっていた。

陽介は体力をつけるために、中一のころから早朝のランニングを続けている。純粋に体力をつけるためにはじめたランニングだが、毎日継続できたのは、他にも理由があったからだ。

陽介の走るコースの折り返し地点にある、一本のガジュマル。まだ低い位置にある太陽の光を浴び、やわらかく輝いている。その様子を見てみると、部活のことの悩みなど、どうでもいいことのように思えてくる。そして、いつかは何とかなるだろうという気さえ

してくるのだった。

だから今朝も、いつも通りの時間に、いつもの道を走っていた。

「あれ……？」

ガジュマルの木が見えてきたところで、陽介は足を止めた。よく目をこらして見た。見間違いではない。人が一人、ガジュマルと向き合うような形で立っていた。この辺りで人と会うことはほとんどない。不思議に思いながらもゆっくりと、人影に近づいていく。

陽介と同じくらいの年の少女だった。着古したようなセーラー服。黒い髪が風にゆれている。顔立ちはよく見えないが、白い手足は細く、どこかはかなげに見える。

少女がこちらを向いた。白い肌に整った目鼻立ち。黒い瞳が陽介をじっと見つめている。

陽介は一瞬、少女から目が放せなかった。ほほから首筋にかけて、少女の白い肌にくつきりと、赤黒い大きな傷が刻まれている。

陽介は、見てはいけないうるものを見てしまったような気がした。

「……どうも。」

と小さく礼をしてランニングを再開した。……というより走って逃げた。しかし、その場から遠ざかってい

けばいくほど、少女のことが気になってくる。こんな気持ちには初めてだ。

その日は一日中、少女のことばかり考えていた。夏休みの課題は進まず、部活へ行っても身が入らないような状態だ。

何て名前だろう。明日もまたあの木の下にいろのだろうか。あの傷はどうしたのだろうか。傷を見て逃げ出したことで悲しい思いをしていないか、それが一番気になった。

次の日の朝、陽介は少女に会えることを期待しながら走っていた。ガジュマルの木の下に、昨日と同じ人影が見える。陽介はうれしくなった。次第に走るペースも速くなっていく。

少女は昨日と同じように、ガジュマルと向かい合うように立っていた。陽介が近づくと、こっちを向いて傷を隠そうともせずに見つめてくる。

「え……、えつと……。オレ、陽介っていうんだけど……。」

「しぐれ。」

しどろもどろになっている陽介に、少女は答える。

「あたし、しぐれっていうの。」

少女―しぐれの声を聞くと、陽介の緊張もほぐれてい

った。

「しぐれはどうしてこんな時間に、こんな場所にいるんだ？」

「……陽介がいつもここを走ってたから、ここにいれば会えると思って。」

陽介は飛び上がりたほうがいいだろうか。

「どこから来たんだい？どこに住んでるのか教えてよ。」

陽介の質問にしぐれが黙って下を向く。困っているようにも見えない。言いたくないのは顔の傷と関係あるのかもなあ……。そう思い、陽介はもうその話題には触れないことにした。

「しぐれは、毎日ここに来れるのか？」

「……明日も、ここにいる。」

毎日来れるのかは分からなかったが、明日も、またしぐれに会えることが分かって、陽介はほっとした。

次の日も、その次の日も、陽介はしぐれに会いに行った。そのたびに、陽介はしぐれにいろいろな話をした。学校のこと、部活のこと、友達のこと、家族のこと……。しぐれは陽介のとなりに座り、ほほ笑みながら、それを聞いていた。

しぐれと出会って七日目の朝、陽介は心の中にひっかかっていたことをしぐれに話してみることにした。

「オレさあ、部活やめようと思うんだ。」

「え……。」

しぐれの顔から笑みが消えたことに陽介は気づかない。

「正直、あんまりうまくないし、もうどうでもよくなつてきて……。それに、部活をやめればしぐれと会う時間も……。」

「どうして？」

しぐれが陽介の言葉をさえぎった。いつの間にか立ち上がり、怒っているような、悲しんでいるような表情で、陽介を見つめている。

「どうして、そんなこと言うの？陽介はサッカーが好きなんじゃないの？」

「……好きだけど、がんばっても意味ないような気がして……。」

「だから、もういいの？」

しぐれは静かに、だがはっきりとした声で言った。

「意味のないことなんてない。陽介の一生はすごく長いと思う。でも、だからって『今』から逃げだしていいの？今を一生懸命生きれば、きっとできないことなんてないから。あたしは、陽介に会えてよかった。陽介に会えなかったら、あたしはただ、何もせず生きるだけだった。朽ちるのを待つだけだった。でも、陽介

に会えて『今』がすごく楽しくなつて、一生懸命生きよう、つて思えた。だから……。」

しぐれは泣いていた。そして、一呼吸置いて、静かに言う。

「……陽介にも『今』を大切に、一生懸命生きてほしい。」

「……ごめん。」

陽介はただ、そう言うことしかできなかった。

その日、陽介は部活に行かず、一日中部屋にこもっていた。

しぐれがあんなに必死にしゃべるなんて……。『今』を大切に生きるってどういう意味なんだろう。

とにかく、明日しぐれに聞いてみよう。そしてこれからどうしたらいいのか相談に乗ってもらおう。そう思うと少し心が軽くなった。

翌日、陽介はガジュマルの木の下へと急いだ。

「あれ……？」

木のそばにいるはずのしぐれの姿がない。

「しぐれ？」

呼んでも返事がない。近くを探してみてもどこにもいなかった。

「昨日のこと、やっぱり怒ってるのかな……。」

木の根元に腰かけて、ふと見ると、いつもしぐれが座

ついているところに何かが転がっている。それを何となく手に取り、見てみる。とたんに陽介は息がつまりそうになった。

陽介が拾い上げたものはセミだった。頭部に、しぐれのほほの傷とそっくりな傷のあるセミだった。

「これ、まさか……。」

もう動くことのないセミを手のひらにのせ、じっと見つめた。

そういえば、しぐれと一緒にいたのは七日間だ。セミは地上に出て七日間しか生きられない。

……このセミは……しぐれ……？

悲しい気持ちがかみ上げ、涙がこぼれてくる。しかし、それと同時に、しぐれへの感謝の気持ちもあふれてきた。

しぐれに会えなかったら、オレ、部活やめてたか、そのままずるずる引きずってたかのどっちかだったよ。

……しぐれはもしかして、オレに今を大切に生きてほしいと、伝えるために現れたのではないか。陽介はふと思う。もし、そうだとしたら……。

「……オレ、もう少し、『今』を一生懸命生きてみるよ。」

手のひらの小さなセミを、ガジュマルの木の下にそ

っと埋めた。

せみ時雨だけが、やさしく響く中、陽介はガジュマルの木に背を向け歩き出した。

誰もいなくなったガジュマルの木の下。キラキラと差しこむ木漏れ日の中に一人の少女が立っていた。ほほから首筋にかけて、大きな傷のある、髪の毛長い少女だった。少女は陽介の去った道をぼんやりと眺め、やがて、小さくほほ笑んだ。うれしそうに、切なそうに。そしていつの間にか、木漏れ日に同化するように、静かに、静かに、消えていった。

